時間停止能力者と天才の無能力者

三隅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時間停止能力者と天才の無能力者

【Ｎコード】
Ｎ０２９２Ｐ

【作者名】
三隅

【あらすじ】
時間停止能力を持つ少年と天才の少女の闘争の日々の話。

少年は割と調子に乗っていたが、冷静だった。
「この能力、人にバレたら人生終わるな。黙ってよ」
少女は割と驚いていたが、冷静だった。
「あなた、時間を止められるの……？」
少年は泣いた。
「人生オワタ」

とある日。
４０過ぎのマッチョのおっさんが公園にいた。
「やらないか」
「うほっ、イイ能力者」

また、とある日。
妙齢の黒髪ロングの超絶美人の女性が話し掛けてきた。
「あ、あのっ、私たちの組織に入りませんか？」
「入りますっ、ええ、入りますとも！」

また、とある日。
中学校から出てきた双子の兄妹に喧嘩を売られた。
「あのおにーちゃん、くせー」
「くせー、私たちと同じ臭いがぷんぷんするー」

大体こんな話。

第一話　少年、出会う（前書き）

パロディ等多分に含みます。
文章も稚拙ではありますが、よろしければお付き合いください。

第一話　少年、出会う

「東、ここで筆者が言いたいのはどういうことだと思う？」
「多分、聞いてませんでしたって言いたいんだと思います」
「よくできたな。その場に立ってろ」

クラスメイトの笑いと先生の怒りを頂戴して起立。
まだ４月、ということで座席は出席番号順のまま。
俺の名前は東信志、というわけで一番前、と見せかけての一番後ろだ。

「まったく……」
ぶつぶつ言いながら現代文の教師はカリカリと黒板に文字を書いていく。
立っていると良く見えるが、禿げあがった頭が哀愁を誘う。
結婚はまだらしいが……　無理だな。
気持ちの良い春の風が申し訳程度の教師の髪を揺らす。
神様えげつねえ。

そんなことを考えながら授業を聞き流した。

しばらくしてチャイムが鳴った。

起立、礼、と簡単な挨拶を終えると、現代文の教師はそそくさと教室を出ていった。

途端に騒がしくなる教室。

つまり放課後。

もう授業終わりか。

さて。どうするかな。

「東、お前まだ部活決めてないんだってなー」

「ん？　まあな」

隣の席に座ってるメガネの良く似合う飯田がもったいねえ、と呟く。

そして思いっきり顔を近づけて鼻息を荒くする。

お前はウシか。

「ど、どうした飯田」

「もったいねえ」

「そ、そっか」

「そっかじゃねーよ、まったく、お前運動まあまあできるし勉強もまあまあできるし

顔もまあまあいいんだから有効に使えよなー」

「どれもまあまあなんだな……」

「そういやさっきはどうしたよ。

授業中に笑いを取りにくるとは思わなかったぜ」

「ん、ちょっと考え事をな」

「ふーん」

ちょっとびっくりしたが特になんでもないようだ。

「でさでさ」

でさでさってなんだよ。

「お前、女にモテてるだろ？」
「脈絡もなにもねえな」
「い、いいんだよ、こまけえな。
でさでさ……」

そのときだった。

「しねっ、キモオタっ」
「へぶらいっ」

意味不明の悲鳴を上げながら飯田は倒れた。

「なあ、東ー。
テニス部に入らないかー？」

飯田を蹴っ飛ばした坂井は人懐っこい笑顔を輝かせながら勧誘に来た。
サラサラの髪の毛が似合う、小柄で小学生みたいなやつだ。
ちなみに男な。

「おい、坂井、謝れよぉ」

飯田は床に倒れたままそう言った。
起きあがれよ。

ひでえ。

「うっせーキモオタ」

「くそっ、このチビが」

うん、はやく起き上がろうな。

「ああん？　なんだよこのキモオタデブ。
眼鏡似合ってるからって調子乗るなよ」

なにこの争い。

「あー、二人とも悪いな、先帰るわ……」

ギャーギャー争ってる二人を尻目に俺はそそくさと教室から出た。

ちなみに飯田は女。

教室から出ると、現代文の教師が待っていた。

「……えっ」

「なにが『えっ』だ！　教師を待たせるとは！
さっさと職員室まで来い！」

「呼び出されてたっけ……
なんてことだ……」

「いいからさっさと！」

「は、はい……」

教室からは笑い声と飯田と坂井の争う声が聞こえた。

飯田うっせえ。

ちなみに飯田はそんなデブじゃないぜ。
俺が保証する。

「いいか！　だからお前はだな……」
「……」

黙ってひたすら説教を聞くだけの簡単なお仕事。
今時こんな時間をかけて説教をする先生もいるんだな……

高校ってのはすげえところだよ……
天国のおっかさんも安心だぁ……

ちなみに死んでないよ。

「聞いてるのか！」
「あ、はい。それはもうしっかりと」
「まったく……今日のところはこれまでにしておいてやる！
さっさと帰れ！」
「あ、はい……」

もう午後8時なんですけどね。
何時間説教聞いてたんだろ。
まあいいや。

職員室を出ると外はもうだいぶ暗かった。

ちなみに職員室は5階建ての学校の三階にある。
そして下駄箱は一階。

さっさと行こう。

夜の学校は新鮮だった。
一言でいうと怖い。
まじ怖い。
それこそ能力を使いたくなるほど。
使わないけどさ。

肌寒さを感じながら廊下を速足で歩く。
4月といってもこの時間は寒い。

早く家帰ってのんびりしよう。

外履きに履きかえ、そそくさと外にでる。
するとそれに合わせたかのように風が吹きつける。

むう、寒い。
俺、寒がりなんだ、これ豆な（豆知識な、ということ）。

上腕を少しでも寒さを紛らわそうと擦りながら歩いていると、
自転車置き場につく。

かぎー、自転車のかぎー。

そう思いながらズボンのポケットを探っていると、
「なあ、兄ちゃん、暇か？」
と真後ろから声をかけられる。

ここで大事なのはかなり近距離での真後ろだということだ。
それこそ息が吹きかかる距離だ。

「……ッ！！」

振り返って距離をとる。

目の前には４０代くらいのおっさんがいた。

第一話　少年、出会う（後書き）

読んでいただいてありがとうございました！
少女に出会うのもすぐですねー（棒
かなり不定期の更新になると思いますが、よろしければお付き合いください！

第2話　少年、会話する

「お、おじさん、誰……？」

およそ5歩の距離をとって対峙する。
あたりは既に暗く、人影は見当たらない。
時折風が吹き、木々がしなる。

「やあ、すまんね。
驚かせてしまったようだ、ハハ」

浅黒い肌のそのオッサンはかなり体つきがよく、
襲いかかられたらたまったものではなさそうだ。

……まあ、しかし、いざとなれば。

「……あの、俺帰りますので」

通してください、と続ける前にジャージ姿のその男はポケットから小さい封筒を取り出した。

「……？」

訝しみながら無視して進もうとすると、

「私を殺すのだったら、そいつを読んでからにしてくれないか？」

＞＞時間停止　発動＜＜

その言葉が終る前には俺は能力を発動させていた。

時を止める能力。

それが俺が持つ、唯一の力。

風は止み、男も口をあけたまま固まっている。

男が動かないことを確認すると、学生服の内側のポケットから折り畳み式のナイフを取り出す。

そして男に近づき、再び動かないことを確認する。

「……とりあえず、大丈夫なのか？」

突発的に時間を止めるときの最大持続時間はおよそ2分。

前もって時間を止めるつもりのときはおよそ5分。

自分では呼吸の感覚に近いと思っている。

長時間は続かないが、一度解除すればまた止められる。

無限には続かないが、少なくとも３０分以上は自由に動けるはずだ。

……で、今どうするかという問題なのだが。

封筒自体に仕掛けがあった場合、俺が干渉した瞬間にそれは時間停止の拘束から離れる。

これは何度も実験したことから分かっている。

時間停止、というよりも他人の時間を止めるというべきか。

例えばコップに入った水。
これを宙に投げた瞬間に時を止めるとコップは宙に静止する。
だが、それに俺が触れると動き出す、つまりコップも中に入ってる水も重力に従って動く。

俺が干渉したものは時が動く、というより物理的な動きを取るようになる。
まあ、簡単にいえばそんな感じだ。

……で、どうするの！

この男が俺の能力を分かってるのかどうかがはっきりとは分からない。
それが分かるまでは……

＞＞時間停止　解除＜＜

とりあえあず様子見だ。

「……む？」

風で木々が揺れ、男も動き出す。

「ふむ、どうやら私はまだ生きているようだ」

ハハ、と男は笑う。

「時はどうやら止めたようだね」

「……」

「ハハっ、そんなに怖がることはない。
なに、安心したまえ。私に君を殺すことなど、ましてや触れることもかなわんよ」

「……なぜ、時を止めてると分かった？」

「おや、話してくれる気になったのか。
嬉しいねえ」

「黙れ、殺すぞ」

「……ふむ。　ただの脅しではないようだ。
君は何度も自分の能力が人にバレたときのシミュレーションをしているようだしね」

「……！
やっぱり俺と同じように何か能力を……？」

というかそれが分かるように俺を誘導してるとしか思えない。
となると、こいつの能力は……！

「そう、私の能力は人の考えを読み取ることだ。
まあ、もっと細かい説明が欲しいと思うが、まあそんなところだ」

「……なにが目的だ、という必要もないのかな」

「ハハ、そう投げやりになることはない。
この能力もそこまで万全なものではないのだよ」

「……で、なんの用だ」

「まあ落ち着いてくれ。
私は警告に来たのだよ」

「警告……？」

「そう訝しまないでくれ。
同じ能力者として君を助けたいだけなんだ」

「……」

「どうもこのあたりは能力者が多いみたいでね。
いろんな奴らがうろうろしているのだよ」

「……例えば？」

「君」

「……」

「ハハ、冗談だ。　そう睨まないでくれ。
いや、本当に冗談だから。　君の思考は怖いな、本当に」

「そうは言うが、今までだって俺は十分警戒をしてきているつもりなんだが」

「うむ、まあそうだろうね」

「……足りない、と？」

「ハハハ、君は怖いなあ。
普段はもっと穏やかだろう」

「……」

「すまん、すまん。
まあ、私が話しておきたいのはこのあたりの能力者のこと。
特にその中でもかなり危険な部類に入る連中の能力だ」

「……へえ」

「興味は持ってもらえたようだね。
よかった、よかった」

「おっさんは能力者同士の衝突を避けるために動いてるんだな」

「そういうことだ。
君はものわかりがよくて助かる」

「だが、それはお前になにかメリットがあるのか？」

「ああ、ある。
能力者が公になるのは避けることができる」

「能力者通しの衝突は情報の漏洩につながると？」

「その通りだ。どのような能力者がいるかも分からない世の中だからね」

なるほど。
こいつの言うことはもっともだ。
俺の知らない情報がポンポン出てきて驚いているが、むしろ知らずによくここまで生きてこれたという安堵と恐怖の方が大きい。
このおっさんは間違いなく俺の能力も、存在も、ずっと以前から気付いていたはずだ。
おっさんがこういう奴だからこそ助かってるものの、冷や汗ものだ。

「……で、能力者っていうのはどんなのがいるんだ？」

「うむ。
まあ、そんなにたくさんいるわけではないからここで覚えて帰ってほしい」

「ああ、分かった」

「まず、単純に知っておいてほしいだけの能力者から言おうか」

そこまで言って咳払いすると、おもむろに右腕を上げた。

「……？　いったいなにを……」

（（聞こえますか。　お二人とも））

頭の中で声がした。
いや、気のせいか。

（（聞こえたら左手を上げてもらえますか））

？？？
気のせいじゃ、ない？

自分の思考、心の声とでもいうべきか。
その中に自分の意思からではない声が紛れ込んでくる。

「ふふ、聞こえるだろう？」

おっさんは笑いながら左手も上げた。
万歳の姿勢になっている。
右手は下げてもいいんじゃないかな。
あの姿勢って意外と辛いだろうし。
いや、でもこのおっさん鍛えてるし問題ないのか。

おっとそんなことより。

あわてて左手を上げる。

（（聞こえているようですね））

聞こえているんだけれども。
なんとも奇妙な感じだ。
頭の中で一人で会話しているような気がしてくる。

「ハハ、みんな最初はそういう風に思うのだよ」

男は楽しげにしている。
なんかむかつくな、この状況。

（（東信志くん、ですね。　私はそこの男性の協力者です））

そうしてその人の話は始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0292p/

時間停止能力者と天才の無能力者

2010年12月4日16時25分発行